

デート・ア・ファンタジー

ノクトに幸せを……

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とある世界、とある王が闇を祓つた。その身を引き換えに。
しかし王の魂は消えてなどいなかつた……

??ファイナルファンタジー15のネタバレを含みます。嫌な方はブラウザバックを
お願いします。

目次

1

十香デッドエンド——プロローグ

十香デッドエンド——遭遇
十香デッドエンド——説明
十香デッドエンド——学校

36 22 8

十香デツドエンド——プロローグ

「ありがとな、ルーナ、みんな」

うつろわざる王は玉座に座し、ここに至るまでの旅路に想いを馳せる。

本当に、長い旅だつたと、王は目を細める。その瞳には今もありありと旅の光景が浮かぶ。楽しかった……本当に楽しかったのだとうつろわざる王は虚空を見つめた。

「オヤジ、一緒に過ごせて……幸せだつた」

今は亡き父王に語りかけるように、うつろわざる王は呟く。そして細めていた目を瞑り、天を仰いだ。それが伝えることが出来る最期の機会だと知つて……

「ルシスの王よ——集え！」

うつろわざる王は召喚した父王の剣を大理石の床に突き立て、それに呼応するがごとくその場に光が集結する。

その光はそれぞれ武器の形を模つており、それらを突如として出現した鎧の王達が携えた。

その中の一人が先ずは駆けた。そして携えた剣を真なる王へと突き立てる。

「ゞあつ！」

光となつた王の力がうつろわざる王の指輪へと取り込まれていく。それを確認した他の王もまた武器を取り、次々とうつろわざる王へと突き立ててゆく。

「つあ、うが、ぐあ！」

その度にうつろわざる王は苦悶の声をあげ、息絶え絶えになりながら、なんとか父王の剣を離さぬようにと意識を保ち続けた。それを手放すのは最後であると決めていたから。

「つ……オヤジ——後は任せろ」

そして最後に燃え盛るように現れたのは手放した父王の剣を携えたうつろわざる王の父。

父は構えた父王の剣でうつろわざる王を玉座ごと貫いた。

「う……あ」

うつろわざる王の意識は次の瞬間には光へと飲み込まれて、光の粒子たちが渦巻く異界に浮かんでいた。その手には父王の剣。それを徐に下へと投げ、シフトする事でそしてさらなる深層へと足を踏み入れた。

その先で、うつろわざる王を闇が待ち構えていた。

互いに手を差し出し、構える。しかし闇に光が触れた。その瞬間、光に氣を取られた

闇には決定的な隙が生まれ、その隙にうつろわざる王は歴代の王達を召喚した。

うつろわざる王の体内から突き破るように、現れた歴代の王達は次々に闇へと殺到し、次の瞬間には闇は跡形もなく消滅した。

そして、うつろわざる王もまた、闇歴代の王達を召喚した……闇を祓つた代償として、崩れ去る。

「……長かつたなあ」

うつろわざる王、クリスタルに選ばれし真なる王もまた闇と同じようにそこで終わりを迎えた。

筈……だつた。



電子音が部屋に鳴り響く。丸まつた布団から手が伸びて、その音の元である時計を止めようと奮闘する。が電子音が鳴り止むことはなかつた

そもそもぞと動き、布団の隙間から時計を睨みつける。

「たく、なんだよ。人が気持ちよく寝てるつてのに……誰だよ……あ、俺か」

ぶつくさと言いながら、布団から抜け出すのは黒髪の男。

比較的イケメンに部類されるであろう彼はボサボサの頭を搔きながら、目覚ましを止める。

「あーそうか、おやつさんとお袋さんが出張だつけか……メシを作んなきやいけねえのか、それでこんな時間に。あーも、メンドクセエ」

乱雑に着替えながら、寝癖を適当に手で抑える。ぽりぽりと手櫛をするついでに頭を搔く。欠伸をしながら、ぼつりと呟いた。

「こんな時、イグニスがいてくれりやあな……イグニス？」
はて、誰だつたか……そう考えると頭痛がした。

「いつてえ……たく、なんだつてんだよ」

時たまこういうことがあつた。知らない筈の人物の顔を思い出し、その度に頭痛がする。キツチンに着いた男はとりあえず水を呷つた。

どうにか落ち着いてきた頭痛にイライラして、冷蔵庫を蹴つた。
しかし生身が無機物に勝てる筈もなく、男は痛みで無言のままうずくまつた。
「おつはよー！」

そこに珍獣がやつてきた

無理やり痛みから立ち直った男は珍獣に対し、何事もなかつたかのように見栄を張る。

「おう、琴里」

「ん？どうしたのだおにーちゃん？なんか涙目だけど」

「なんでもねえよ。ほらさつさとソファーにでも行け、邪魔だ邪魔だ」

適当にあしらつて、そのままキツチンから珍獸——琴里を追い出す。

それから簡単な料理を開始して、数分後、琴里がつけたのかテレビのニュースがやつていた。

『——今日未明、天宮市近郊の——』

「あん？なんだよ、近いな」

いつもはBGMにしかならないニュースで、男はつい反応した。何故ならば、アナウンサーの声に聞きなれた街の名前が入っていたからだ。

世界情勢などに興味のかけらも示さない男でもそればかりは気になり目を向ける。画面には滅茶苦茶に破壊された街の様子が映し出されていた。

建物は拳つて崩壊し、道路もズタズタに崩落し、瓦礫の山を築いている。

男は息を吐く。

「空間震かよ」

心底うんざりした様子で首を振る男。

空間の地震と言われる広域空間震動現象。

発生原因、発生時期が一切分かつてない、被害規模不確定の爆発、震動、消失などの現象の総称だ。

この現象が初めて確認されたのは30年前のユーラシア大陸のど真ん中——当時のソ連、中国、モンゴル一帯がくりぬかれたかのごとく消失したのだ。

男の世代では教科書でも写真が載っている。

死傷者、およそ1億5000万人。人類史上、最大最悪の災害である。

そしてそれから半年間、世界各地で似たような現象が起きていた。

場所は不特定で、地球上の至る所でそれは起こっていた。

もちろん日本も例外でない。

ユーラシア大陸の惨事から6か月後、東京南部から神奈川県北部、今、男と琴里たちが住んでいる地域がごつそりと焦土に変わってしまった。

空間震はそれを最後にしばらく確認されなかつた。

だが5年前、再開発された天宮市の一角で再び空間震が発生したの皮切りにまたちらほらとだが、発生し始めたのだ。それもその多くが日本で……

もちろん人間も空白の25年間で何をしてこなかつたわけではない。

再開発をなされた箇所を中心に全国の地下シェルターの稼働率は爆発的に上昇。

更に空間震の兆候を事前に観測することもできるようになり、最終的には自衛隊に災

害復興部隊を言うのもできた。

被災地に赴き、崩壊した施設、道路を再建するのが目的なのだがその仕事ぶりはまさしく魔法だ。

「なんでこんな時に起こるかねえ……起こらなくなつたんじゃねえのかよ」

「なんでだろーねー」

琴里は曖昧に答える。

「去年からマジで多いっての……」

「そだねーちよつと予定より早いかな」

「早い？なにがだよ」

「んー、こつちの話ー」

「あつそ、それはいいからメシを運べ。さつさと食つてしまふぞ」

「はーい！」

カウンターープルに出した簡単な朝食を出し、それを受け取つた琴里がさつさと居間に運んでしまう。

ふと、キツチンの窓から見える空を見て、男、士道はため息を吐いた。

「あつそ……」

なにやら厄介ことでも来そうだなど、士道は考えた。

十香デッドエンド——遭遇

「ふあーあ……ねみ……」

欠伸をしながら士道は空を仰ぐ。その空は全く雲がないといつていいほど快晴で、それに士道は眉をひそめた。

そんな彼を気に食わなかつたのか琴里が食いかかつてくる。

「もーおにーちゃん！ お昼ファミレスなの忘れないでね！」

そう、士道は琴里と昼食をファミレスで食べる事を約束していた。

昼食はなにがいいかと琴里に聞いた時、彼女はファミレスのキッズプレートを所望した。士道も昼食を作るのが面倒だったので二つ返事で了承したが故に琴里は士道が約束を忘れるのではないかと心配だつたのだ。

「はいはいわかつたわかつた。極力覚えとく」

「極力じやなくて、絶対なの！ 絶対の絶対なの！」

「わーだからさつさと行け。遅刻するぞ」

しつしつと手で琴里を追い払う。むーっと頬を膨らませた琴里だったが、次の士道の行為でそれも萎んでしまう。

乱暴に、だが優しく士道は琴里の頭を撫でていた。

それも早々に切り上げ、士道は自身の通う学校の方へと歩き出した。

「んじや、ファミレスでな」

「うん！絶対だぞー！」

「おう」

琴里の方に振り向くことなく、軽く手を挙げ別れの挨拶をした士道。
これの一部始終を見ていた同じ学校の生徒にシスコン呼ばわりされたのは士道も琴里も知らない。



士道が学校に着いたのは始業数分前だった。

士道が通う高校は都立来禪高校だ。

空間震で更地になつた一帯は最新技術のテスト都市として再開発がなされた。この高校もそうだ。

都立高校とは思えないほどの設備に加え、数年間に創立されたばかりなので内外装も損傷が無い、もちろん地下シェルターも最新のものが備わっている。と良いことづくめ

である。しかしその為か入試倍率は低くないが、適度な学力を持つ士道は難なく合格を果たし、今に至る。

そして、士道は自身にあてがわれたクラス……二年四組の教室へと足を踏み入れる。そのまま、黒板に貼られている座席表を見ようとするが、その時……

「——五河士道」

後方から不意に静かで抑揚のない声がかけられた。

「……俺か？」

「そう」

誰も反応しないことを見て、ようやく自分の事かと気がつき振り返ると、そこには一人の少女がこちらを見ていた。

肩に触れるか触れないかぐらいの髪に人形のような顔が印象の少女だ。あまりにも表情が無さすぎる。

「初対面……だよな？」

「覚えてないの？」

「は？」

「そう」

士道が首を傾げると少女は特に落胆した様子も無く、そのまま彼の横を通り抜けた。

首をかしげる土道に直後、後ろから衝撃が襲つた。何事かと後ろを振り返ると、そこには士道の友人、殿町宏人がいた。

「おう、セクシャルビースト五河。いや／＼にしても士道。またお前と同じクラスになるとは……この殿町宏人、運命を感じるぜ」

「うるせえよ。つか氣色悪い」

「酷つ！つて言いたいが、言つてから俺もなに言つてんだろうってなつた」

「で？俺を叩いた理由は？」

叩かれた背中をさすりながら士道は殿町に説明を求めた。

「ああ、そうだそうだ。いつの間にどうやつて鳶一と仲良くなりがつたんだ？」

「鳶一？誰だそりや」

「とぼけなさんなつて、今の今まで楽しくお話してたじやねえか」

そう言いながら顎をしやくつて窓際の席を示す。

そこには先程の少女が座つていた。

「……ああ、あいつが……であいつがどうしたんだよ」

「いや、お前ホント知らないのかよ」

「だから何がだつての！さつさと教えろつて」

士道がそう言うと、殿町は信じられないといった具合に両手を広げ、驚いたような顔

を作った。

そこらへん欧米人顔負けである。

「鳶一だよ、鳶一折紙。ウチの学校が誇る超天才。聞かんのか？」

「ああ、全然」

「成績は常に学年主席、この前の模試に至つちや全国トップとかいう頭のおかしい数字だ。しかも体育の成績もトップ、ついでに美人ときている。そんな有名人を知らないってどういう事だ？」

「興味ない」

そう斬つて捨てた。これには流石の殿町も苦笑いを零した。

「じやあなんで鳶一がお前の事知つてたんだ？」

「わっかんね。偶然じやね？」

「お前なあ……」

呆れ果てた殿町、だがそこでホームルームの開始を知らせるチャイムが鳴つた。

それに殿町は慌てて、士道は至つてマイペースに席に着いた。

教室のドアがガラガラと開き、そこから緑の淵のメガネをかけた小柄な女性が現れ、そのまま教卓に着く。

「タマちゃんだ……」

「ああ、タマちゃんだ」

「マジで、やつたー」

周囲から好意的なざわめきが聞こえてくる。

「はい、皆さんおはようございます。これから一年皆さんの担任を務めさせてもらいます、岡本珠恵です」

間延びしたような声でそう言う社会科担当のタマちゃんこと岡本珠恵教諭が頭を下げ、微妙に眼鏡がズれて慌てて手で押さえる。

生徒と同年代位に見える童顔に小柄な体躯、そしてのんびりとした性格で生徒から人気の生徒だ。

ふと視線を感じ横に目を向けると……折紙がじーーっと士道に視線を送っていた。

一瞬たじろいだが、すぐにどうでも良い事かと、意識を前に向けた。

「…………」んな時プロンプトがいてくれりや茶化してくれたのかねえ?……ん?プロンプト?

その時、また士道を頭痛が襲った。

「またかよ……なんだつてのホント……」
士道はそう愚痴つた。



始業式を終え教室で土道が帰り支度をしている中、殿町が声をかけてきた。

「土道一、どうせ暇なんだろ？ 飯いかねー？」

「悪いな、先約がある。また今度な」

「む？ 女か？」

「妹だバカ。あれを女と言うんじやねえ」

「なんだそーカ。でも琴里ちゃんなら問題ねえだろ。俺も一緒に行つていいか？」

「ん？ ああ、大丈夫だろうが……」

士道がそう言つた瞬間、殿町が土道に顔を近づけ、ボソボソと告げ口をするように聞いてきた。

「なあなあ、琴里ちゃんつて中二だよな？ もう彼氏とかいんの？」

「あん？」

「いや、別に他意はないけど琴里ちゃん三つぐらい年上の男つてどうなのかと」

「知るかよ。仮に範囲だとしてもお前だけはねえから」

「ヒツデエの。ま、流石の俺も兄妹団欒を突つつくほど野暮でもない。都条例に引っか

かんねえ程度に仲良くしてきな」

「ホント一言余計だよなお前」

そんな時……

ウウウウウウウウウウウウウウウウ———

耳を劈く警報が窓ガラスを震わせた。

一気にシンとなる教室、そしてそこにアナウンスが入る。

『——これは訓練ではありません。これは訓練ではありません。前震が観測されました。空間震の発生が予想されます。近隣住民の皆さんには、速やかに最寄りのシェルターに避難してください。繰り返します——』

「空間震警報……つ」

殿町が額に汗をにじませながら乾いた声を出す。

だが、意外にもみんな緊張と不安を滲ませていてのの比較的落ち着いていた。土道に至つては眉一つ動かしていない。正確には興味を示していなかつた。

この街では30年前の空間震で深刻な被害を受けてからしつこいほど避難訓練を繰り返しさせられていたのだ。

しかもここには全校生徒を収容できる規模のシェルターがあるのだ。

「殿町、シェルターに行くぞ」

「わ、わかつた」

士道の言葉に殿町は頷き、教室を出ていく。

廊下にはもうかなりの数の生徒がシェルターに向かつて列を作っていた。

が、そんな中で一人だけ列とは逆方向、昇降口に向かつて走っている女子生徒がいた。

「鳶……？　おい、何処に行く！」

「大丈夫」

士道の問いかけに折紙はそう答えるだけで、走り去った。何処に行つたのだろうか？

そう考えたが、それも珠恵教諭の大声によつて搔き消された。

「お、落ち着いてください！だ、大丈夫ですから、ゆっくりいー！おかしですよ！おーかーしー！おさない・かけない・しゃれこうべー！」

「しゃれこうべって……」

呆れる士道だったが、そんな珠恵教諭の姿が何故か妹に重なつた。そして思い至り、スマホを取り出す。士道は電話帳から『五河琴里』を選び、電話をかける。

「ん？どうしたよ士道？」

「いや、ちょっととな……」

言葉を濁した。

「…………くそつ、だめか。繫がらねえ。ちゃんと避難してるよな？あいつ」

士道の頭は家族である琴里の事で一杯だつた。何故ならば、士道の脳裏に「絶対だぞー！」という琴里の言葉が響き続けていたからだ。

「頼む、頼むから……」

士道は琴里の携帯にGPSに対応した位置確認サービスに対応していたことを思い出すとすぐに携帯を操作して画面に街の地図と赤いアイコンが表示する。

「つ、嘘だろ…………？」

琴里の位置を示すアイコンは約束のファミレスのド真ん前に停止していた。

「あつのバカ!!」

次の瞬間、士道は列から抜け出し、走り出す。

「お、おい！どこに行くんだよ士道！」

「忘れ物だ！」

そのまま士道は走り、昇降口に出る。

素早く靴を履きかえるとそのまま外に飛び出し、校庭を突つ切り校門を抜け、学校前の坂道を駆け下りる。

そこに広がっていたのは何とも不気味な光景だつた。

車の通らない道路に人影のない街並み。

街路にも、公園にも、コンビニにも誰一人して残つていない。

つい先ほどまで、誰かがそこにいたことを思わせる生活感をのこしたまま、人間の姿が消えている。

その光景に土道は何やら既視感を覚えていたが、今はどうでもいいことだとすぐに振り払つた。

「くそ、あのバカが！なんで残つてるんだよっ！」

ふと、彼の視界に何か動くものが見えた。それは人影のようであり、それが3つ4つと空に浮いていた。

なんだ？とそちらに意識を向けようとするも、そんな余裕はすぐになくなつた。

突然進行方向の街並みが眩い光に包まれたからだ。

そして次の瞬間、耳を劈く爆音、そして衝撃波が土道を襲つた。そして地面を転がり、何度も転がりながらも受け身を取る。

「なんだ……！？」

すぐさま身を起こすと、その先にあつたはずの街並みが消失していた。

街の風景が浅いすり鉢状に削り取られていた。それはまるで、否、まさしく空間震の跡である。それに気がついた土道はさつと顔を青ざめる。琴里がどうなつたのか……。

それだけが頭を占めていて、近づいてくる者に気がつけなかつた。

「お前もか……」

「!?!?」

まずは驚き、そして見惚れた。その暴力的なまでに美しいその姿に。

「……誰？」

「名、か……そんなものは、ない」

その少女は剣を振り上げた。

「……つて、おい待てつて！お前！何しようとしてやがる!?!?」

「それはもちろん——早めに殺しておこうと」

「何でだよ!?!?」

「なんで……？当然ではないか」

少女は物憂げな顔で、

「だつてお前も、私を殺しに来たのだろう?」

というものだから。

「はあ？ 何言つてんだお前？」

士道は素でそう返していた。

「何——？」

少女は驚き、猜疑、困惑が入り混じった目を向けてくる。

そんな時、士道ははたと気がついた。

空から人が来ているのに。

「はあー!?..?」

士道は驚きの声をあげ、少女もまた、空飛ぶ人に気がついた。
空飛ぶ人々は、武装を次々と向けてきた。そのうちの一つ、ミサイルが士道と少女の元へと殺到する。

咄嗟に対ショック体勢を取つた士道だったが、そんな必要はなく、少女が薄い膜のような障壁を張ることでミサイル群を受け止めた。

その煙に隠れて、空飛ぶ人の一人が肉薄していた。

そいつの名を士道は知っていた。

「鳶」、折紙……?

「五河……士道?」

その名を呼ぶと、相手、折紙も士道に気がついたようだ。

しかし、それは一瞬の出来事で、すぐに折紙は視線をあの少女に戻す。

互いに睨み合い、そして刹那の空白は、士道の携帯が鳴ることで終わりを迎えた。

それを合図に、折紙は懐からビームサーベルのような武器を取り出して少女に斬りか

かる。

そして黒髪の少女と激突し……その余波で士道は吹き飛ばされた。

ゴロゴロと転がった士道は頭を瓦礫に打ち付け、そのまま気絶してしまつた。

十香デッドエンド——説明

——やつと、やつと会えたね、■■■

——嬉しいよ。でも、もう少し、もう少し待つて

——もう、絶対に離さない。もう、絶対に間違わない。だから

○

「ノクト、ねえノクトってば！」

「ん……あ、プロンプト？」

「あ、やーっと起きた。ねえ、見て見て、ノクトの寝顔ー」

「あ？ つておま、何撮つてんだよ！？ カメラ取り上げろグラティオ！」

「無防備に寝てるお前が悪い」

「お前も敵かよグラティオ！？？」

「静かにしていてくれ。運転に集中できない」

「あ、ワリイ、イグニス……つてなんで俺が謝なきやいけねえんだよ！」

「あはは、ノクト怒られてやんの」

「誰のせいだ誰の！」



懐かしい、そして大切な夢を見ていた。そんな気がした。

「！」

目が醒める。と同時に土道は驚きの声をあげた。

それもそうだ。見知らぬ女性が土道の瞼を指であけてペンライトの光を当てるのだから。

「……ん？ 目覚めたかね？」

妙に眠たげに、といふか目の下の隈がすごいことになつてゐる女性はぼう、とした声でそう言う。

どうやら気絶していた土道の眼球運動を見ていたようだ。だから顔が近く、そこはかとなくいい匂いがする様な気がした。

「あーっと、誰？」

状況が飲み込めない土道は取り敢えず基本的な事を聞いてみた。

「……ん、ああ」

女性はぼうっとしたまま体を起こすと垂れていた前髪を鬱陶しげにかき上げた。よく見れば、軍服らしき服を纏つた20位の女性だ。分厚い隈に彩られた目、そしてなぜか服のポケットに傷だらけの熊のぬいぐるみが入っていた。

「……ここで解析官をやつている村雨令音だ。あいにく医務官が席を外していてね。……まあ安心してくれ。免許こそ持っていないが簡単な看護くらいならできる」

「解析官？ って事はどうつかの基地かここは？」

解析官という言葉に引っかかり、独自の結論に達した土道。何せ最後に見た光景が謎の空飛ぶ軍隊とドレスを纏つたこれまた謎の少女である。そこからあの謎の軍隊の施設に収容されたのかと考えたのだ。

自分が寝ているのは簡素なパイプベッド。そして周りを取り囲むように白いカーテンが仕切を作っている。学校の保健室のような場所だ。

だが、天井には無数の配線と配管がむき出しになつていて。それもまた彼の考えを助长させた。

「……いや、ここは『フラクシナス』の医療室だ。で、それよりも、だ。大丈夫かね？」

「……なんでも何も、泣いているじゃないか？」

「は？」

士道は無意識のうちに目元に触れていた。触れた部分の指を濡らす。そう、彼は泣いていたのだ。

「な、なんで」

慌てて袖で涙を拭う。すぐに涙は止まつたが、目は真っ赤に腫れているのが士道にはわかつた。

「くそ、なんだよこれ。なんで泣いてんだよ……」

「……さてね。本人もわからないならわかりようもないさ」

ちくしょと、苛立つ士道。それを令音は宥めるように肩を叩いた。

「……落ち着きたまえ、君にはこれから色々と説明せねばならないんだ」「はあ？ 説明？ なんの？」

「……行けばわかる」

「あーもう、分かつたよ！」

涙を見られた事からの羞恥心からくる苛立ちを全面に出す士道。

それに嘆息した令音はフラフラとした足取りで士道を先導する為にカーテンを開ける。外は少し広い空間になつておりベッドがいくつか並んでおり、奥には見られぬ医療

器具が見える。

令音は部屋の出入り口らしき方向に向かつてフラフラと歩いていき、足をもつれさせてガンつ！と音を立てて壁に頭をぶつけた。

「つておい、大丈夫か？？」

生來の優しさから恥ずかしさも忘れ、令音の心配をする士道。そんな彼の横で倒れなかつたが令音は壁にもたれかかり、呻く。

「……ああ、すまんね。最近寝不足なんだ」

「見りやわかる、どんだけ寝てねえんだよ」

士道が聞くと令音は少し考え指を三つ立てる。

「三日？そりや眠いな」

「……30年かな」

「なわけねえだろ！」

嘘であつてくれと叫ぶ。本当だとしたら、もはや生物の領域を超えている。彼女の外見年齢も。

「……まあ、最後に睡眠をとつた日が思い出せないのは本当だ。最近不眠症気味でね」

「いや、それにしては……」

本気の口調だったような。という言葉を飲み込む。

「……と、失礼。薬の時間だ」

と、令音は懐を探ると錠剤の入ったピルケースを取り出す。

そしてふたを開けると錠剤をラップ飲みのように一気に口にほおり込む。

それに慌てたのは土道だ。

「つておい！」

「……なんだね騒々しい」

「飲み過ぎだつての！ てか、何の薬だそれ！」

「……すべて睡眠導入剤だが？」

「死ぬぞり？」

「……でも、今一つ効きが悪くてね」

「どんな体してんだよ！」

「……まあ甘くておいしいからいいんだが」

「……偽物じやねえの？ それ」

「……とにかく、こつちだ。ついてきたまえ」

令音は空になつたピルケースを懐に戻してまた危なつかしい足取りで歩きだし、医務室の扉を開ける。

土道もすぐに靴を履いてそれに続く。

「……、りや……」

部屋の外は単色で構成された機械的な床と壁の狭い廊下のようになっていた。士道は感心したように目を細めたがすぐに令音を見つけるとその後に続く。

フラフラとおぼつかない足取りの後をついて行きながら士道は通路を歩いていくと、通路の突き当たりに隣に小さな電子パネルが備え付けられた。扉の前で足を止め、令音が言う。

令音が電子パネルを操作すると滑らかに扉がスライドする。

「……さ、入りたまえ」

令音が中に入つていき、士道もそれに続く。

「……凄え」

そこは言つてしまえば船の艦橋のような場所だつた。士道がくぐつた扉から半楕円の形に床が広がつており、その中心には漢潮汐のような席が設けられている。

左右両側になだらかな階段があり、そこから下段にはコンソールを操作するクルーたちが見受けられる。中は全体的に暗い感じがする。

「……帝国？なんじやそりや……」

また馬鹿な思考をしたと頭を振る士道。そんな彼をよそに、令音は言い放つ。

「……連れてきたよ」

「（バ）苦勞様です」

それに応えた艦長席の横に立った長身の男が執事のように軽く礼をする。ウェーブのかかった髪に日本人離れした鼻梁を持つ青年だ。

「初めまして。私はこここの副指令、神無月恭平と申します。以後お見知りおきを」「……おう」

士道は小さく頷く。

「司令、村雨解析官が戻りました」

神無月が声をかけると、こちらに背を向けていた艦長席がゆっくりと回転する。
そして、

「――歓迎するわ。ようこそ、《ラタトスク》へ」

司令と言うには幼い女の声を響かせ、真紅の軍服を肩掛けしたにした少女の姿が明らかになつた。

「……なんでよりもよつてお前なんだよ……」

頭を抱えるように士道は呻く。

大きな黒いリボンでツインテールにまとめられた髪、小柄な体躯、どんぐりの見たいな丸っこい目。そして口にはキャンディーのチュッパチャップスを加えてる。

〔琴里〕

全体的に多くの違いがあるが、その少女は間違ひなく土道の妹、五河琴里だった。それに少女はニヤリと口の端を歪めるのであつた。



「——で、これが精霊と呼ばれてる怪物で、こつちがA S T。陸自の対精霊部隊。厄介なものに巻き込まれてくれたわね。私たちが回収してなかつたら今頃2、3回ぐらい死んでたかもしれないわよ。で、次に行くけど——」

「いや、待てよ」

ペラペラと説明を続ける琴里を土道は制す。

「何、どうしたのよ。折角司令官じきじきに説明してあげてるいるつていうのに。もつと光榮にむせび泣いてみなさいよ。今なら特別に足の裏ぐらいなら舐めさせてあげるわよ」

土道を見下すような視線を作りながら琴里が普段とは全く違う暴言を吐いてくる。

「ほ・・・・・・・つ、本当ですか!?」

喜びの声を上げたのは琴里の横に立っている神無月だったが、すぐに琴理が
「あんたじやないわよ」

「ぎやおふ・・・・・・・！」

神無月のみぞおちに肘鉄を打ちこむ。それを一通り見た後に、士道は口を開いた。
「誰がするかよ、誰が。ていうか琴里、無事だつたんだな。心配させやがつて」

「あら、心配なら無用よ。っていうか、士道こそ、空間震警報が鳴つてゐるのに外に出てる
なんて馬鹿なの? 少しでも巻き込まれれば死んでたのよ?」

「原因がよくもまあぬけぬけど……ほれ、ケータイの位置情報。ファミレスの前で止
まつてるだろ?」

「ん? ああ、これの事?」

「? なんで持つてるんだ?」

琴里が見せたケータイに、士道はてつきり落としたものだと思い込んでいた為に首を
傾げた。

「……、ファミレスの地下とか?」

「残念。逆よ逆。見てもらつた方が早いわね。一度フィルターを切つて」

そう船員に指示を出すと、途端に地面が消えた。

「うおつり？こりや……」

「騒がない。これは外の景色が見えてるだけよ。ここは天宮市上空1万5000メートル。位置的には待ち合わせしてたファミレスの辺りになるわね」

「……成る程な、漸く合点がいった。で？説明の続きを？」

「本当ふてぶてしいわね……まあいいわ。彼女はこの世界に存在しないモノであり——この世界に出現するだけで己の石とは関係なく、あたり一帯を吹き飛ばしちやうの」

琴里が両手をドーン！と広げ、爆発を表現する。

「？」

「つまり、空間震つて呼ばれる現象はこの子たちによつて起こされてるの」

「……へえ……」

一度は首を傾げた土道だが、琴里のセリフによつて漸く理解した。空間の地震、空間震。人類を、世界を蝕む理不尽な現象の原因が彼女とは土道は思わず眉をひそめる。

「ま、規模はまちまちだけどね。小さければ数メートル程度、大きければ——それこそ、大陸に穴が開くぐらい」

「……30年前のユーラシア大空災？」

「その通り」

士道の言葉に琴里は頷く。

「それはさておき……」つちがAST。精霊専門の部隊よ」

「精霊専門の部隊ね…………で、具体的にはどうするんだ？」

「簡単よ。精霊が出現したら、その場に飛んで行って処理をするのよ」

「処理？……まさか殺すのか？」

「そのまさかよ」

「くそつたれ」

士道はそう吐き捨てる。それを意外に思つたのか琴里は眉をあげる。

「どうして？あれは怪物よ？この世界に現れるだけで空間震を起こす最凶最悪の猛毒
よ」

「……お前言わなかつたか？空間震は精霊の意思とは関係なく起ころうとして」

「ええ。少なくとも現界時の爆発は本人の意思とはかかわりが無いというのが有力な見
方よ。でも、そのあとのASTとのドンパチでの破壊痕も空災被害に数えられるけど」
「それは、なんだつけ？ASTだつたかなんだつたかが攻撃するからだろう。と言うか
ほとんどあつちのせいって気がするが……」

「そうかもしれないけど……それは推測でしかない。もしかしたらASTが攻撃しなく
ても破壊活動するかもしないのよ？」

「ありえねえよ」

「どうして？」

「壊すことが好きな奴があんな顔できつかよ」

そう土道は吐き捨てる。そう、破壊が好きな奴はもつと違う顔をする。

「……随意か不随意かなんて関係ない。精霊が現れるだけで空間震が起ころ。そんな核

弾頭レベルの危険生物をかわいそうって理由だけで放置はできないのよ」

「ごちやごちや五月蠅えよ。取り敢えず話してみねえとわからんだろうが」

ふん。と息を荒げる土道。それに琴里は溜息を吐くかと思いつや、こんな事を言い出した。

「そう、それじゃあ……手伝つてあげる」

「は？」

土道が怪訝そうに視線を向けると琴里が両手を広げる。

令音を、神無月を、下段に広がるクルーたちを、そしてこのフラクシナスを示すように。

「私たちがそれを手伝つてあげるつて言つたのよ。《ラタトスク機関》の総力を以て、士道をサポートしてあげるつて」

「そりや、頼もしい事で……」

「ええ。だつてそのために作られた組織だもの」
「…………はあ？」

士道はそこで漸く気の抜けた顔をした。

「教えてあげるわ。武力を持つて殲滅する以外の方法を……」

「……」

しかし琴里の言葉に一気に気が引き締まつた。そして琴里は言い放つ。
「デートしてデレさせるの」

「…………

はい？」

今度こそ、士道はズッコケた。

十香デッドエンド——学校

「来て」

突然士道は折紙に手を掴まれ、訝しげに目を見開いた。

「あ？ つておい、ちょっと待て！」

ガタンと椅子を倒し折紙に引っ張られて教室を出ていく。

後方では殿町がポカンと口を開けており、女子の集団がキヤー キヤー言っている。
メンドクセエ。と士道はぼんやりと考える。

士道が精霊と邂逅した日の翌日。

あの後、士道は別室に移され、知らないおじさんに事態の詳細を深夜まで延々と聞かされ後、様々な書類にサインをされてから、家に帰された。

風呂に入つてからベッドに入り、そのまま眠りにつき、学校に行く時間には目を覚ます。

その後、いつも通りに授業を終え、帰りのホームルームが終わつたと思つた瞬間の出来事だった。

折紙は無言のまま階段を上がり、しつかりと施錠された屋上の扉の前まで来るとよう

やく手を離す。

人がいるのに、隔絶されたような寂しさがある空間だ。

「で、俺に何か用？」

ふてぶてしく問い合わせる士道。

普通ならこういった場所に女の子に連れられてきたら普通は甘いシチュエーションを期待するが、士道はそうはいかない。

折紙の雰囲気がそう言つた事をする気が無い雰囲気と分かつてゐるからだ。初心な士道でもそれくらいはわかる。

「昨日、なぜあんなところにいたの？」

士道の予想通り、折紙の話は昨日の件だつた。

「えーと、ああ、妹が警報中に街にいたみたいでな。探しに行つたんだ。全く迷惑な話だろ？」

「そう……見つかつたの？」

折紙は表情を変えずに聞いてくる。

「まあ……おかげさまでな」

「そう、よかつた……昨日、あなたは私を見た」

「ああ……」

「誰にも口外しないで」

士道が頷くと折紙が有無を言わさぬ迫力で言つてきた。

「当然だつての。あんなこと言つたら神経が疑われる」

「それに、私のこと以外も——昨日見たこと、聞いたこと、すべて忘れた方がいい」

「それはあの女の子の事もか?」

折紙は無言で士道を見つめる。

「あの女の子はなんなんだよ?」

精霊の事はラタトスクから聞いていたが、これから的事を考えると多くの情報が必要になつてくる。それがたとえ敵対組織としても。そう士道は考えていた。

「あれは、精霊……私が倒さなければならぬもの」

「そうか……その精霊は……なんつうか、悪い奴なのか?」

士道がそう聞くと、折紙が唇をかみしめたような気がした。

「私の両親は、5年前、精霊のせいで死んだ」

「……………そ、うか」

士道はただそう短く返す。

「私のような人間はもう、増やしたくない」

「……………そ、うかよ」

折紙の言葉は一見すれば非常に素晴らしい言葉だ。だが士道はその無表情な、人形のような目の奥にくすぶつっている暗い憎悪の炎を。何処かで見た覚えがある、その瞳に気がついていた。

が、ここで士道は何かに気付く。

「そういえば。精霊とか、そう言う情報は俺に言つちまつていいのかよ?」

「……問題ない」

「そう言うもんか?」

「あなたが口外しなければ」

「もし話したら?」

折紙は一瞬だまり、

「困る」

「それだけかよ……わーった。誰にも話さねえ。これでいいだろ?」

折紙が頷く。

その会話を最後に折紙は士道から視線を外し、階段を下りていく。

「……あーくそ、わっかんねえ……俺はどうすりやいいんだよ……」

確かに精霊と呼ばれる少女を助けたい。それでも他の人間からすれば災害そのものなのだ。そのせいで死んだ人間もいないわけではない。琴里に啖呵切つた手前が言え

る言葉ではないかもしれないが、正直キツイかもしれない。

——グラティオがいれば、背中を引っ叩いてくれるのかね——
そんな事を考えた。

「……グラティオ？ 誰だそれ」

ズキリと頭が痛んだ。そんな時、

「きやああああああああああああああああ——ツ!!」

廊下から女子生徒の悲鳴が聞こえてきた。

「……つ!!? なんだ!」

士道が慌てて階段を駆け下りると廊下に数名の生徒が集まっているのが見えた。
そしてその中心に、白衣を着た女性が一人、倒れていた。

「おい！ どうしたんだ！」

「し、新任の先生らしいんだけど……急に倒れて……」

「よくわからんが、取り敢えず保健室に……」

士道がそう呟くと白衣の女性がガシツ！と士道の足を掴んだ。

「うおおつ!?」

「……心配はいらない。ただ転んでしまつただけだ」

言いながら女性はゆらりと顔を上げる。その顔に士道は覚えがあつた。

「つて、あんたは……」

長い前髪に分厚い隈、眼鏡をかけているが、その顔を忘れるわけがない。

「——ん、ああ、君は……」

女性、『ラタトスク』の解析官、村雨令音がのろのろと体を起こす。

「アンタこんなところで何してんだ……」

「……見て分からぬかね。教員としてしばらく世話になることにしたんだ。ちなみに

教科は物理。2年4組の副担任も兼任する」

白衣の上のネームプレートを指差して令音が言つてくる。その上のポケットにはあの傷だらけの熊のぬいぐるみがつた。

「いや、わかるかよ」

素で突っ込んだ。そして、人目を集めていることに気づき、近くのものらにもう大丈夫と言ふことを伝え、解散させる。それから令音の腕を掴んで立ち上がらせる。

「……ん、悪いね」

「気にすんなよ。んでだ、村雨……さん? はどうしてここに?」

「……ん、ああ、令音で構わんよ」

「いいのか?」

「……私も君は名前で呼ばせてもらおう。連携は協力と信頼から生まれるからね」

何度か頷いた後に、土道の顔をまじまじと見て、

「……ええと、君は……しんたろうだつたかな?」

「誰だよ!」

全力でツツコんだ。いきなり信頼をどぶ川に投げられたような気分だ。

「……さて、シン、早速だが」

「結局アダ名かよ……まあいいけどよ」

「……昨日、琴理が言つていた教科訓練の準備が整つた。君を探してた所だ。ちょうどいい、このまま物理準備室に向かおう」

「訓練つてのは一体何をするんだ? 令音」

「……うむ、琴理に聞いたがシン、君は女の子との交際をしたことが無いそうじゃないか」

「まあ、な」

告白された事はある。けど、なんとなく理由つけて断つていた。自然と断る言葉を口にしていたのだ。

「……別に責めているわけではない。身持ちが堅いのは大変結構な事だ。……だが、精

靈を口説くとなるとそもそも言つていられないんだ」

「言われなくても分かつてゐる」

頭を搔き毎りながら、ため息をつく。彼女に連れられて物理準備室に向かう途中、職員室の近くを通った時だつた。

「……あん？」

士道は妙なものを見つけて立ち止まる。

「……どうしたのかね？」

「嫌な予感がする」

視線の先に担任のタマちゃん教諭が歩いているのだが、その後ろに見覚えのある赤いツインテールが見えたのだ。

「あ！」

士道の視線に気付いたのだろうが、その髪の持ち主、琴里が表情を明るくさせて、突撃してくる。

「おにーちやあああああん！」

「ほらよ」

「……グフウ」

咄嗟に士道は令音を盾にその突撃から難を逃れた。

代わりに令音が遅れて小さく呻き声を上げたが。

「おにーちゃん！ 可愛い妹のハグを令音で躱すなんて酷いよお！」

「お前はあれか？バカなのか？あんな勢いで突撃してこられたら普通避けるか何かを盾にするわ」

「……それ以前に私の心配はしてくれないのかね？」

混沌を極める中でタマちゃん教諭が近づいてきた。

「あ、五河くん。妹さんが来てたから今校内放送で呼ぼうと思つてたんですよ

「……あつぶねえ」

正直それはちよつと恥ずかしい。と士道は額に浮かぶ汗を拭う。

よく見れば琴里は来賓用のスリッパをはき、中学校の制服には入校証をついている。

「おー、先生ありがとう！」

「はあい、どういたしましてえ」

元気良く手を振る琴里に先生がにこやかに返す。

「やー、もう、可愛い妹さんですねえ」

「……そーですね」

なんと答えればいいか迷った挙句、適当に肯定しておいた。

先生はバイバイと手を振るとそのまま職員室に歩いていく。

「で？琴里」

「んー、なーに？」

琴里が丸っこい目を見開きながら首を傾げる。

その仕草は士道のよく見知った可愛い妹の物だった。

「精霊とか……の話だ。後できちんと聞かせろよ？」

「わかつたー！じゃ、早く行こ！」

「……意外と速かつたね、琴里」

「うん、途中でラタトスクに拾つてもらつたからね♪」

車感覚で空中艦を使うなよ、と士道は内心でツッコむ。だが、決して顔には出さない。口にも出さない。何故なら、言えば後で琴里からありがたあい言葉をもらうに決まっているからだ。

「それよりほら、おにいちやん。早く行こう」

「はいよ」

士道はやれやれと首を振り、琴里に続いた。

面倒なことになりそุดなど、適当に考えていた。